

京都府

籍水利資人工（すいりをかりてじんこうをたすく）

京都先端科学大学附属中学校 三年

江部 花音

「今、琵琶湖の水位下がりがまくってんの知ってる？このままではほんまに琵琶湖の水止められてしまうで！」理科の授業中に先生が放った衝撃の一言。一体どういうことだろうと半信半疑で「琵琶湖 水位」と検索すると信じられない光景が表示された。琵琶湖の水位は基準値よりも七十センチ近くも低下。明智光秀の廃城、坂本城の石垣が地上に姿を表しモンサンミッシェルの様だと話題になっている。夏以降の降水量が著しく少なかったのが原因とのことだった。十四年間生きてきて、ここまで生活用水について心配したのは今日がはじめてである。私は、普段何げなく使用している琵琶湖の水がどれほど貴重なものなのかを再確認すべく、琵琶湖疎水記念館に赴くことにした。疎水記念館は小学校の時から訪問である。当時私は疎水についてあまり関心が持てなかったのだが中学生となった今行ってみると想像していたよりもはるかにスケールの大きな話に驚愕し、疎水について意欲的に知ろうとしなかった自分を強烈に恥じた。琵琶湖疎水ができたのは明治時代。京都が日本の首都ではなくなったところから物語は動き出す。当時の京都府知事、北垣国道は何としてでも京都にもとの活気を取り戻したいと考え、疎水の開発に至った。疏水工事の責任者は当時まだ二十三歳の田邊朔朗である。まだ大学を卒業したばかりの若者がかつての都の行末を背負っていたなど現在では考えられない。彼は東京大学工学部で英語のみでの授業を受け海外の新しい技術を進んで取り入れた。堅坑工事はまさにその代表例である。長等山の上から四十七メートルもの堅坑を掘り、そこから横に掘り進めることでトンネルを作る。この堅坑工事は日本で初めてであり、またここで作った第一トンネルは当時日本最長のト

ンネルであった。さらに日本人のみで行う最初の事業でもあったという「日本一づくし」。だがその建設は困難を極めた。当然だが堅坑の中は薄暗く作業は全て手作業である。途中で地下水が溢れ出してしまうこともあったそうだ。そのような状況下でも京都の未来を夢見て工事を続けた人々を思うと涙が溢れそうになる。また田邊も米国に視察に行ったり自ら土木工学についての授業を行ったりしたという。こうして四年七ヵ月に及ぶ工事の末、第一疎水が完成した。その後、水力発電所と第二疎水も完成し、日本初の電車運行、電灯、紡績、伸銅など新たな産業に活用された。

琵琶湖疎水には建設に関わった人物や政府の有力者たちによる扁額が掲げられている。その中で田邊はこんな言葉を残している。「籍水利資人工」自然の水の力を、人の仕事に役立てるという意味である。当たり前のように水道を捻ると出てくる琵琶湖の水。しかしそれは信じられない程多くの人々の力の賜物である。だがその根底にあるのは、母なる湖こと琵琶湖の存在であることを忘れてはならない。我々は自然の中の水を「お借りして」いるのである。漢字六文字で水の尊さを簡潔に訴えた素晴らしい文章だと感じた。気付くと展示物を前に大きく頷いていた。

後日、滋賀県まで父とドライブに行った。小さい頃から慣れ親しんできた琵琶湖は、記憶の中にある姿と同じである。大雨が降った影響で少し水位が回復したのだという。少し野性的な、しかし母性も感じるような力強い波。青々と日の光に照らされたその姿はどこからどう見ても自然の産物である。「籍水利資人工」疎水記念館で見た言葉が頭をよぎる。そして私は母なる湖に向かって宣言した。「京都まで来はったら、大切に、誇りを持って役立てて頂きます。」